世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

大学生の場所愛着に関する一考察

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2017-04-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小西, 啓史, 野沢, 久美子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/432

大学生の場所愛着に関する一考察

A Study on Place Attachment for Students

小　西　啓　史
KONISHI, Hiroshi

野　沢　久美子
NOZAWA, Kumiko

要　約

武蔵野大学の学生292**名（１年生**108**名、２年生**68**名、３年生**89**名、４年生**27**名）を対象に、彼らが通っている大学キャンパスに対する場所愛着（**place attachment**）について検討した。**

評価の対象となったのは“武蔵野キャンパス”と“有明キャンパス”の２つで、後者は2012**年４月に開設された新しいキャンパスである。そのため、**2012**年７月の調査実施まで約３か月の間、１年生は武蔵野キャンパスだけで授業を受け、有明キャンパスへの通学経験はほとんどない。２年生は、１年生のときの１年間を武蔵野キャンパスで過ごし、２年生になってから有明キャンパスに通っている。３年生は２年間を武蔵野キャンパスで過ごし、３年生になってから有明キャンパスに通っている。４年生は３年間を武蔵野キャンパスで過ごし、４年生になってから有明キャンパスに通っている。４年生は授業がほとんどないため新キャンパスへの通学経験はあまりない。**

調査に用いられた尺度は、Willams & Vaske（2003）**が開発した**Place Attachment Inventory（PAI）**と添田・大山・大野（**2007**）、大山・添田・大野（**2007**）が開発した場所愛着評定尺度の２つである。**

PAI**を分析した結果、１年生は他学年に比べ、武蔵野キャンパスへの場所依存性（**place dependence**）、場所同一性（**place identity**）ともに低いこと、一方、４年生は武蔵野キャンパスへの依存性、同一性が高いが、有明キャンパスへの同一性は低いことが明らかになった。場所愛着評価尺度の分析結果からは、２，３，４年生は、現在通っている有明キャンパスに対する肯定感が高いが、郷土意識、所属意識は低いこと、これまで通っていた武蔵野キャンパスに対する郷土意識、所属意識が高いことが明らかになった。**

これらの結果から、場所愛着の形成には時間的要因が大きく影響していることが明らかになった。

キーワード：場所愛着、大学生、キャンパス、環境心理学

問　題

2011年３月11日の東日本大震災では多くの人が住まいを失った。また、福島第一原発の事故によって長年住み慣れた住居から立ち退かざるを得ない人も多く出た。現在も避難地域に指定されたため、我が家に帰ることもままならない状況に置かれている。大震災のあと、東北をはじめとする日本各地で一番歌われたり演奏された曲は唱歌『故郷（ふるさと）』だったといわれている（松本，2012）。

こうした状況を見ても明らかなのは、我々が住み慣れた土地に強い愛着を持っていることである。ここには、自分が生まれ育った場所、日々の生活を送っている場所に対しての、単に生活の利便性といった面だけではない、より情緒的側面が存在していることが考えられる。大野・古川（2008）は、ある場所に対する愛着を住民自身が自覚していないことも多く、その場所を失う、もしくは失う危機に直面し、ようやく愛着を抱いていたことに気づくと考えている。

1．場所への愛着

環境心理学では、こうした住み慣れた場所や行きつけの場所へ抱く好意的な感情を場所愛着（place attachment）と呼んでいる。場所愛着についてはこれまでにも様々な定義がなされてきたが、代表的なものにLow & Altman（1992）のものがある。彼らは、場所愛着を「人の場所との情緒的、感情的な結びつき」と定義した。

これまでの研究で、その場所で費やした時間の総数（その場所との関係の長さ）が場所愛着において重要な要因であることが明らかにされている（Low & Altman, 1992; Moore & Graefe, 1994; Relph, 1976; Tuan, 1977; 槇野・添田・大野，2001）。

2．場所への愛着を測定する方法

人々がその場所に対してどれくらいの愛着を持っているかを明らかにするため、これまでに様々な方法が工夫されてきた。以下にその代表的なものをあげる。

（1）ライフヒストリー・インタビュー

性別や年齢の異なる何人かの人々にそれぞれの人生を語ってもらい、その語りの中からその人と場所との関わりについて考察する方法。相澤（2000）はこの方法を用いて、「場所への愛着における人間関係の重要性」「アイデンティティの根幹としての場所と愛着感」「属性の違いからくる場所愛の差」などの因子を抽出・分析した。

（2）テクスト分析

ある場所について書かれた著述物から、場所愛着の抽出を試みる方法。相澤はエッセイの内容から、場所への愛着的表現を抜き出し、「子ども時代の場所経験と場所への愛着」「場所の記憶と場所への愛着」「場所への愛着からくる街への語りかけ」などの因子を抽出・分析した。

（3）写真投映法（Photo Projective Method：PPM）

写真による環境世界の投影的分析法。調査対象者にカメラを渡し、何らかの教示を与えて写真を撮らせることで、認知された環境と個人の心理的世界を理解しようとする。林・岡本・藤原（2008）はキャンパス内を対象に調査を行った結果、特定の場所や施設などを

とおしてキャンパスへの愛着が形成されることが明らかになった。

（4）場所愛着度測定尺度

質問紙法を用いて場所愛着を測定する方法。質問紙法による愛着行動を測定する試みはこれまでに数多く行われてきたが、代表的なものにWilliams & Vaske（2003）が開発したPlace Attachment Inventory（PAI）がある。対象地域への愛着度に関する質問への回答結果を分析した結果「place dependence（その場所への依存感）」と「place identity（その場所との一体感）」の２つの因子が見いだされた。「place dependence」とは“機能的な愛着”で、その場所が目標を達成する上で重要な役割を果たしているという認識を表している。「palce identity」とは“情緒的な愛着”で、その場所が人生に意味と目的を与える上で重要であるという象徴的な意味合いを表している。

その他、槇野・添田・大野（2001）が開発した居住地への愛着評定尺度は、「共同体意識」、「対外意識」、「住環境安定意識」、「郷土意識」の４因子から構成されている。

3．地域への愛着

引地・青木・大淵（2007）は、地域に対する愛着形成の過程を研究した結果、自分が住んでいる地域に対する評価が高い住民ほど、地域コミットメントが高く、地域連帯感も強いことが明らかになった。鈴木・藤井（2008）は、地域への愛着が地域での協力行動に与える影響について調査を行った。その結果、地域への愛着が高い人ほど、町内会活動やまちづくり活動など地域への活動に熱心な傾向があること、地域内の活動について他者に依存する傾向が低く行政を信頼する傾向があることが明らかになった。

近年、大学の地域貢献が強く求められるようになっている。文部科学省（2012）の「大学改革実行プラン」でも、地域再生の核として大学を位置づけている。大学と周辺地域が良好な関係を築いていくためには、学生たちの大学周辺地域への愛着を形成させることが重要であると考えられる。

大学生のキャンパス周辺地域への愛着に関する研究には、添田・大山・大野（2007）、大山・添田・大野（2007）などがある。彼らは、場所愛着評価尺度への回答から、周辺地域への自分の地域としての感覚やくつろぎを表す「郷土」、周辺地域の一員としての自覚や連帯感を表す「所属」、周辺地域に対する興味や積極的な心構えを表す「関与」、周辺地域への根づきを表す「肯定」の4因子を抽出した。これをもとにアンケート調査を行った結果、大学生のキャンパス周辺地域への愛着が多面的であること、また、地域住民と比べて「郷土」と「所属」は弱く、逆に「肯定」や「関与」が高い傾向が見られた。

4．武蔵野大学学生の場所愛着

今回調査対象とした武蔵野大学は、2012年４月より従来からの武蔵野キャンパスと新しく開設された有明キャンパスの２キャンパス体制に移行した。１年生は全員が武蔵野キャンパスで学び、９学部のうち４学部の学生は２年生から有明キャンパスで学ぶシステムを採用している。そのため、調査実施時期までに１年生は有明キャンパスへの通学経験がないこと、２，３，４年生も有明キャンパスへの通学経験は約３か月しかないことが特徴である。

本研究では、これら両キャンパスを経験した学生を対象に、大学およびその周辺地域の

場所愛着について調査を行い、大学生たちの場所愛着を明らかにすることを目的とする。これまでの研究をもとに、時間の長さが場所愛着に大きな影響を及ぼすという仮説を立てた。

方　法

調査対象者：武蔵野大学学生292名が調査に協力した。内訳は、１年生108名（男子20名、女子88名）、２年生68名（男子17名、女子51名）、３年生89名（男子23名、女子66名）、４年生27名（男子５名、女子22名）であった。今回は、場所愛着についてもっとも大きな影響を及ぼすと思われる時間的要因を分析の対象とするため、以下に示すような学生に協力を求めた。

１年生：入学以来約３か月、武蔵野キャンパスに通学している。
２年生：１年間武蔵野キャンパスに通学し、有明キャンパスは約３か月の通学。
３年生：２年間武蔵野キャンパスに通学し、有明キャンパスは約３か月の通学。
４年生：３年間武蔵野キャンパスで通学し、有明キャンパスは約３か月の通学（ただし、多くの学生は授業がほとんどないので、実質的な通学回数は少ない）。

手続き：調査は７月上旬、授業時間を用いて実施された。場所への愛着度を明らかにするために、以下の２つの尺度を用いた（appendix参照）。

①Place Attachment Inventory（Williams & Vaske, 2003）

この尺度はplace dependenceとplace identityの２因子、それぞれ６項目から構成されている。英語の質問文を日本語に翻訳し、その後バックトランストレートを行い翻訳の適切性を確認した。以下の議論では、place dependenceをその場所への機能的依存感として「場所依存性」と、place identityをその場所との情緒的一体感として「場所同一性」という用語を用いる。

②キャンパス周辺地域への場所愛着評定尺度（大山・添田・大野，2007；添田・大山・大野，2007）

この尺度は、「郷土」５項目、「所属」４項目、「関与」２項目、「肯定」３項目、計14項目から構成されている。

１年生は武蔵野キャンパスおよびその周辺地域について、２年生以上は両キャンパスおよびその周辺地域について質問に答えた。２年生以上は現在有明キャンパスに通っているので、武蔵野キャンパスについての回答は回想法になる。

結　果

Place Attachment Inventoryの結果はTable 1に、愛着評定尺度の結果はTable 2に示した。

１．学年間の比較

①Place Attachment Inventory（PAI）

有明キャンパス：「場所依存性」においては学年間に傾向差が認められた（F=2.460 df=2,1101 p<.10）。多重比較（Tukey法）の結果、２年生と４年生において傾向差が認められた。この結果から、４年生は他学年に比べ有明キャンパスに対しての依存感が低いことが明らかになった。

「場所同一性」においては学年間（２，３，４年）に有意差が認められた（F=7.262 df=2,1101 p<.001）。多重比較の結果、２年生と４年生、３年生と４年生の間に有意差が認められた。この結果から、４年生は他学年に比べ有明キャンパスに対しての一体感が低いことが明らかになった。

武蔵野キャンパス：「場所依存性」において学年間に有意差が認められた（F=3.291 df=3,1748 p<.05）。多重比較の結果、１年生と２年生の間に有意差が、１年生と４年生の間に傾向差が認められた。これらの結果から、１年生は他学年に比べ武蔵野キャンパスに対しての依存感が低いことが明らかになった。

「場所同一性」においては学年間に有意差が認められた（F=25.936 df=3,1748 p<.001）。多重比較の結果、１年生と２年生、１年生と３年生、１年生と４年生の間に有意差が認められた。これらの結果から、１年生は他学年に比べ武蔵野キャンパスに対しての一体感が低いことが明らかになった。

②場所愛着評定尺度

有明キャンパス：有明キャンパスに対しては、「関与」においてのみ学年間に有意差が認められた（F=5.671 df=2,365 p<.01）。多重比較の結果、２年生と４年生の間に有意差が、３年生と４年生の間に傾向差が認められた。これらの結果から、４年生は他学年に比べ有明キャンパスに対する関与意識が低いことが明らかになった。

武蔵野キャンパス：武蔵野キャンパスに対しては、４因子すべてにおいて学年間に有意差が認められた。以下、それぞれの因子についての分析結果を述べる。

「郷土」において学年間に有意差が認められた（F=11.851 df=3,1456 p<.001）。多重比較の結果、１年生と２年生の間に、１年生と３年生の間に、１年生と４年生の間に有意差が認められた。「所属」において学年間に有意差が認められた（F=7.439 df=3,1164 p<.001）。多重比較の結果、１年生と３年生の間に、１年生と４年生の間に、２年生と３年生の間に有意差が認められた。「関与」において学年間に有意差が認められた（F=5.671 df=2,365 p<.01）。多重比較の結果、１年生と２年生の間に、１年生と３年生の間に有意差が認められた。「肯定」において学年間に有意差が認められた（F=4.545 df=3,872 p<.01）。多重比較の結果、１年生と２年生の間に傾向差、１年生と３年生の間に有意差が、１年生と４年生の間に有意差が認められた。

これらの結果から、武蔵野キャンパスに対する郷土意識、所属意識、関与意識は１年生が他学年に比べて低いこと、肯定的態度は１年生が他学年に比べて高いこと明らかになった。

2．キャンパス間の比較

１年生は有明キャンパスに通学した経験がないので、２年生以上の結果のみを分析する。

①Place Attachment Inventory（PAI）

２年生：「場所依存性」においてキャンパス間に有意差が認められた（t=-6.02 df=407 p<.001）。「場所同一性」においてもキャンパス間に有意差が認められた（t=−7.45 df=407 p<.001）。

３年生：「場所依存性」においてキャンパス間に有意差が認められた（t=−7.41 df=533 p<.001）。「場所同一性」においてもキャンパス間に有意差が認められた（t=−10.61 df=533 p<.001）。

４年生：「場所依存性」場所依存性においてキャンパス間に有意差が認められた（t=−6.39 df=161 p<.001）。「場所同一性」においてもキャンパス間に有意差が認められた（t=−10.95 df=161 p<.001）。

これらの結果から、２，３，４年生は、有明キャンパスよりも武蔵野キャンパスに対して、高い依存感情と一体感を持っていることが明らかになった。

②場所愛着評価尺度

２年生：「郷土」においてキャンパス間に有意差が認められた（t=−6.30 df=339 p<.001）。「所属」においてキャンパス間に有意差が認められた（t=−2.05 df=271 p<.05）。「関与」においてはキャンパス間に有意差は認められなかった。「肯定」においてキャンパス間に傾向差が認められた（t=1.84 df=203 p<.10）。

３年生：「郷土」においてキャンパス間に有意差が認められた（t=−9.94 df=444 p<.001）。「所属」においてキャンパス間に有意差が認められた（t=−5.87 df=355 p<.001）。「関与」においてキャンパス間に有意差が認められた(t=−3.94 df=177 p<.001)。「肯定」においてキャンパス間に有意差が認められた（t=4.01 df=266 p<.001）。

Tab. 1　有明キャンパス・武蔵野キャンパスに対するPAI得点

	有明キャンパス		武蔵野キャンパス	
	dependence	identity	dependence	identity
１年生	—	—	2.48	2.41
	—	—	(1.12)	(1.04)
２年生	2.27	2.31	2.68	2.84
	(1.15)	(1.18)	(1.25)	(1.31)
３年生	2.16	2.21	2.56	2.87
	(1.14)	(1.14)	(1.13)	(1.19)
４年生	2.04	1.91	2.73	3.17
	(1.18)	(1.07)	(1.24)	(1.44)

（　）：標準偏差

Tab. 2　有明キャンパス・武蔵野キャンパスに対する定着評価尺度得点

	有明キャンパス				武蔵野キャンパス			
	郷土	所属	関与	肯定	郷土	所属	関与	肯定
１年生	—	—	—	—	2.49	2.68	3.71	3.09
	—	—	—	—	(1.15)	(1.12)	(0.99)	(1.12)
２年生	2.32	2.64	4.09	3.40	2.84	2.79	4.06	2.85
	(1.28)	(1.30)	(1.05)	(1.25)	(1.32)	(1.30)	(1.07)	(1.31)
３年生	2.20	2.64	3.84	3.12	2.93	3.06	4.15	2.78
	(1.23)	(1.25)	(1.22)	(1.26)	(1.24)	(1.23)	(0.93)	(1.20)
４年生	2.14	2.43	3.46	3.31	2.81	3.02	4.04	2.70
	(1.40)	(1.30)	(1.30)	(1.28)	(1.32)	(1.25)	(1.13)	(1.21)

（　）：標準偏差

４年生：「郷土」においてキャンパス間に有意差が認められた（t=−4.64 df=134 p<.001）。「所属」においてキャンパス間に有意差が認められた（t=−5.10 df=107 p<.001）。「関与」においてキャンパス間に有意差が認められた（t=−4.91 df=53 p<.001）。「肯定」においてキャンパス間に有意差が認められた（t=4.01 df=80 p<.001）。

これらの結果から、２年生は有明キャンパスよりも武蔵野キャンパスに対して郷土意識、所属意識が高いが、武蔵野キャンパスよりも有明キャンパスに対して肯定的であること、３年生は郷土意識、所属意識、関与意識ともに有明キャンパスよりも武蔵野キャンパスにおいて高いが、武蔵野キャンパスよりも有明キャンパスに対して肯定的であること、４年生は郷土意識、所属意識、関与意識ともに有明キャンパスよりも武蔵野キャンパスにおいて高いが、武蔵野キャンパスよりも有明キャンパスに対して肯定的評価をしていることが明らかになった。

考　察

本研究では武蔵野大学の学生たちが、有明キャンパス、武蔵野キャンパスに対して抱いているイメージを場所愛着の視点から検討した。

その結果、有明キャンパスに対して、Place Attachment Inventoryでは４年生がその場所への依存感、その場所との一体感ともに２年生、３年生に比べて低いことが明らかになった。また、全学年とも平均点は３（５ポイント尺度で中間）を下回っていた。これは、調査が実施されたのが有明移転後4か月に満たないために、依存性、同一性ともに形成されるには時間が短かった結果と考えられる。特に４年生は他学年に比べて通学機会が極端に少ないことが大きな理由と考えられる。場所愛着評定尺度では全学年ともに関与意識が高く、これは特に２年生に高かった。肯定的評価も全学年にわたって比較的高かった。一方、所属意識や郷土意識は低いことが明らかになった。この結果は、添田・大山・大野の研究結果と一致していた。このことから、キャンパスや周辺地域に対して関与意識や肯定意識が高く、郷土意識や所属意識が低いのは、大学生の一般的傾向であると考えられる。

武蔵野キャンパスに対しては、１年生が依存性、同一性ともに他学年に比べて低いことが明らかになった。一方４年生は、依存性、同一性ともに他学年に比べて高かった。場所愛着評定尺度では、全学年ともに関与意識が高く、特に１年生に比べ２，３，４年生において関与意識が高かった。一方、郷土意識、所属意識は全体的には低かったが、１年生に比べると２，３，４年生は高い傾向が見られた。上級学年ほど武蔵野キャンパスへの通学経験が長いことが、このような傾向をもたらしたものと考えられる。これらの結果は、時間的要因が場所への愛着を形成する上で大きな要因であることを示すものであった。

以上の結果から、本研究の仮説は検証された。これは従来の研究を肯定するものであった。

謝　辞

本調査を実施するにあたってご協力をいただいた、北岡和彦教授（武蔵野大学人間科学部）、古家聡教授（武蔵野大学教養教育部）、藤森和美教授（武蔵野大学人間科学部）に感謝いたします。また、貴重な資料を提供いただいた立川公子非常勤講師（武蔵野大学人間

科学部）に感謝いたします。

引　用　文　献

相澤亮太郎　場所への愛着に関する人文主義的地理学的研究－ライフヒストリーとテクスト分析－　神戸大学発達科学部卒業論文（未刊行）

林幸史・藤原武弘・岡本卓也（2008）写真投影法による場所への愛着の測定　関西学院大学社会学部紀要,106,15-26.

引地博之・青木俊明・大渕憲一（2007）地域に対する協力行動の要因：地域に対する評価と愛着の効果　日本社会心理学会第48回大会発表論文集，456－457.

Low, S.M., & Altman I. (1992) Place attachment a conceptual inquiry. In I. Altman, & S.M. Low (Eds) Place attachment. Human behavior and environment. Advances in theory and research. Vol.12. New York: Plenum Press.

槇野光聰・添田昌志・大野隆造（2001）地域に関する情報が居住地への愛着形成に与える影響　日本建築学会大会学術講演梗概集（関東），769－770.

松本健一（2012）『故郷』はなぜ心に響くのか　てんとう虫，44(9), 8-11.

文部科学省（2012）大学改革実行プラン http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/06/1321798.htm. 2012年10月１日閲覧

Moore, R.L., & Graefe, A.R. (1994) Attachment to recreation setting:The case of rail-trail users. Leisure Sciences, 16, 17-31.

大野隆造・古川槙一（2008）環境の変化により愛着が自覚される場所に関する研究　その1　愛着を抱かれる場所の抽出　日本建築学会大会梗概集（中国）113-114.

大山理香・添田昌志・大野隆造（2007）大学生のキャンパス周辺地域への愛着に関する研究　その２－場所への愛着の形成と地域における行動への影響－　日本建築学会大会梗概集（九州）1065-1066.

Relph, E. (1976) Place and placelessness. London:Pion.

添田昌志・大山理香・大野隆造（2007）大学生のキャンパス周辺地域への愛着に関する研究　その１－アンケート調査及び場所への愛着の定義－　日本建築学会大会学術梗概集（九州）1063-1064.

鈴木春菜・藤井聡（2008）地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究　土木計画学研究研究・論文集，25(2), 357－362.

Tuan, Y.F. (1977) Space and place: The perspective of experience. Minneapolis:Universty of Minnesota Press.

Williams, D.R., & Vaske, J.J. (2003) The measurement of place attachment: Validity and generalizability of a psychometric approach. Forest Science, 49, 830-840.

Appendix

【問】「キャンパスおよびその周辺地域」に対するあなたの考えを答えてください。

〈Place Attachment Inventory〉

1. **私はこの場所を、自分の一部のように感じている。**(I)
2. **ここは、私がやりたいことをするには最高の場所だ。**(D)
3. **ここは、わたしにとって特別な場所だ。**(I)
4. **ここより良い場所は他にはない。**(D)
5. **私はこの場所に強い一体感をもっている。**(I)
6. **私は他のどの場所にいるよりも、ここにいると多くの満足感を得ることができる。**(D)
7. **私はこの場所に強い愛着をもっている。**(I)
8. **他のどの場所でやるよりも、ここでやることが私にとって重要だ。**(D)
9. **この場所にいると、自分がだれであるかを実感することができる。**(I)
10. **この場所でないと、私はそれをやることはできないだろう。**(D)
11. **ここは私にとって、とても意味のある場所だ。**(I)
12. **他の場所と同じように、私はここでも楽しんでやることができるだろう。**(D)

D：place dependence　I：place identity

〈場所愛着評価尺度〉

1. **この地域はただ大学に通うためだけの場所である。（肯定）***
2. **自分はこの地域の一員であると感じる。（所属）**
3. **将来この地域が生活しやすくなればよいと思う。（所属）**
4. **長い間この地域を離れていると寂しく感じる。（郷土）**
5. **新聞やテレビでこの地域が出ていたら気になる。（関与）**
6. **別の場所から戻ってくるとほっとする。（郷土）**
7. **卒業してもこの地を離れたくない。（郷土）**
8. **同じ地域でも用のない場所には興味がない。（肯定）***
9. **この地域を知っている人がいるとうれしい。（関与）**
10. **卒業してしまえば再びこの地域に遊びに来たいとは思わない。（肯定）***
11. **「あなたの地域」といわれてもピンとこない。（郷土）***
12. **地域の人は「同じ仲間だ」という感じがする。（所属）**
13. **この地域は第二の故郷だと思う。（郷土）**
14. **この地域の人たちと親しくつきあっていきたい。（所属）**

***逆転項目**